

28. シロアリ：この不思議な生き物

シロアリについては、11.2.をはじめとして多くの箇所様々問題に触れてきた。しかしこれまでに触れられなかった点について、ここにさらに列挙してみたい。

28.1. 家屋害虫としてのシロアリ

シロアリは家屋害虫，人類文明の大敵のひとつであった。その研究の歴史は文献上でも3300年以上遡ることができるほどで (Snyder, 1956)，ヒトの文明史はヒトとシロアリとの間の格闘の歴史でもあったといえる。

一般人にとってシロアリとは、まず一番大切な財産である家屋を加害する恐ろしき存在。1995年の阪神淡路大震災において、ヤマトシロアリ *Reticulitermes speratus* (ミゾガシラシロアリ科) (図14-5)の被害を受けた木造家屋が多数倒壊するなどの被害が生じ (吉村, 1995)，過去米国・California州でも同様の報告が見られる (Steilberg, 1934)。地震の被害に遭われた方々はまことに気の毒であったが、これに関連して、非常に興味深い文献記述がある。それはEmerson (1938)によるもので、シロアリが木造建築物を加害するに際して、それが崩壊するまで喰い尽くすことはなく、もし崩壊が起きたとすれば、その直接の原因は嵐，地震，新たな加重などであるという。これは何を意味するかというと、シロアリといえども彼らが巣喰う木造建築物は、その持主たるヒトにとっての家であると同時に、彼らにとっての家または職場 (餌場)ともなっている。家や職場が大事なのはヒトもシロアリも同じ。従って大事な構造物はこれを倒壊させるまで喰い尽くすことは、シロアリにとっても非適応的といえる。江戸時代の長崎・出島での見聞により、シロアリの日本名が“Do-Toos” (堂倒す)であったと流布されたが、これは「お堂が倒れるまで喰い尽くすヤツ」という意味ではなく、「堂通す」、即ち「お堂でも何でも突き通すように穴をあけるヤツ」という意味の九州方言だったようである (巻頭引用参照)。Emersonの記述が正しければ、シロアリにやられた木造建築物が倒れるのは、恐らく地震や台風の場合に限られた現象ということになる。しかしシロアリが喰い荒らした家はやはり人が住めない。インド・Punjab州では町ひとつが *Heterotermes indicola* (ミゾガシラシロアリ科)の食害で廃墟となり (Roonwal, 1955)，エジプトにおいても *Anacanthotermes ochraceus* (シユウカクシロアリ科) や *Psammotermes fuscifemoralis* (ミゾガシラシロアリ科) が同様の惨状を引き起こす (Hafez, 1980) というから、国・地域によってはその脅威は尋常ではない。New Yorkの自由の女神像の下の構造物もシロアリによる被害を受けたという (Su *et al.*, 1998) から呆れてものが言えない。1960～1980年代の米国におけるシロアリ被害による年間金銭的喪失量は1～34億ドル (Su & Scheffrahn, 1990)，中国でのシロアリによる経済的損失額は毎年1200万元 (李棟 (D. Li)・他, 2004a) と試算されている。